

古今和歌集注釈書における竹取説話

“The tale of the Bamboo Cutter”;

Considered from commentaries on The Kokin Wakashu

飯田 さやか

Sayaka Iida

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 博士後期課程

キーワード : 竹取物語, 竹取説話, 古今和歌集注釈書

Key words : Taketori Monogatari, The tale of the Bamboo Cutter, Commentaries on The Kokin Wakashu

1. 研究目的

『竹取物語』はその成立以降、様々な文学作品に引用・受容されてきた。しかし、平安末以降、それまでの『竹取物語』とは少し違った形の『竹取物語』が現れる。それらは竹取説話と称され、『海道記』を初めとして古今和歌集注釈書類や歌学書、説話集や寺社縁起類に散見され、現時点では三十弱の作品に竹取説話の収録が確認されている。これら竹取説話は、(1)古今集注、(2)寺社縁起関係、(3)『源氏物語』注釈書に現れる紹介記事の三つに大別される(奥津春雄「三つの難題と鶯姫と一竹取説話考序説一」、『徳島文理大学文学論叢』創刊号 1984. 3)。竹取説話については主に奥津春雄氏が詳細に論じており、竹林の鶯の卵から出生することおよび金色の語に関しては、「竹幹の中から美女が生まれても、鶯の卵からかえっても、超自然的なことには変りはない。」(前掲奥津論文)と論じている。鏡を形見に残すことに関して、「面影をとどめた鏡を贈ることの方が情趣深く物語的な雰囲気があると考えられたであろう」

(奥津春雄「室町末期の竹取説話一付、形見の鏡の成立一」、『徳島文理大学文学論叢』第2号 1985. 3)と論じている。しかし、何れも詳細な検討にはいたっておらず、再考の余地があると考えられる。

2. 研究実施内容

古今和歌集注釈書においては、現在『古今和歌集序聞書 三流抄』、『頓阿序注』、『毘沙門堂本古今集注』、『古今為家抄』、『了誉序注』に竹取説話が認められる。

『竹取物語』では形見の品として文、衣、不死の薬が残されていた。その中でも物語の結末に直

結する重要な役割を果たすのが不死の薬である。一方、中世竹取説話では不死の薬が残されるものは少なく、管見の限りでは三十三件のうち『海道記』、『頓阿序注』、『臥雲日件録抜尤』、『聖徳太子伝拾遺抄』、『塵荊抄』、『富士山(謡曲)』の五件である。そのうち、『海道記』以外は全て鏡も併せて残されている。(図1)つまり竹取説話において、形見の品の主流は鏡であることが明らかなのである。前年度は、こうした形見の鏡のなかでも「破鏡」についての調査を進めた。今年度は、鏡から煙が立ち上ったこと背景を明らかにするため、鏡全体について考察した。

『額昭陣状』	歌学書	記載なし
『今昔物語集』卷三十一 三十三話	説話集	記載なし
『袖中抄』	歌学書	記載なし
★『海道記』	紀行文	文(別書)・不死薬(帝)
『古今集注』義	古今集注釈書	記載なし
『古今集注』信	古今集注釈書	記載なし
★『古今和歌集序聞書 三流抄』	古今集注釈書	鏡(帝)
★『頓阿序注』	古今集注釈書	鏡(帝)・不死薬(翁)
★『毘沙門堂古今集注』	古今集注釈書	鏡(帝)
★『古今為家抄』	古今集注釈書	御かゞみ(帝)
★『了誉序注』	古今集注釈書	鏡(翁)
『古今和歌集大江広貞注』	古今集注釈書	なし
★『曾我物語』真名本	物語	返魂香の筥(国司)
★『神道集』	説話集	返魂香の箱(国司)
『詞林采葉抄』富士山	歌注釈書	記載なし
★『三国伝記』	仏教説話	御ん鏡(帝)

『桂川地蔵記』	教訓書	記載なし
★『和歌百首註』	歌注釈書	鏡(帝)
『源氏物語提要』	物語注釈	なし
★『臥雲日件録抜尤』	日記	不死薬、天葉衣、鏡(帝)
『芝草句内岩橋』	歌集	記載なし
『花鳥余情』	物語注釈	記載なし
★『聖徳太子伝 拾遺抄』	説話・歌物語	一面の鏡、不死の薬(帝)
★『塵荊抄』	説話集	鏡、不死の薬(帝)
★『一乗拾玉抄』	法華経直談書	鏡二つに破りて(帝)
★『法華経鷲林拾葉抄』	法華経直談書	鏡二に破りて(帝)
〃	法華経直談書	記載なし
★『聖徳太子伝正法論』慶応本	説話	一人の妃宮、一面の鏡、銀のかむさし、金の扇(帝)
★『歌道寄合肝要集』	歌学書(連歌)	鏡を二つに割りて(翁)
★『富士山(謡曲)』	謡曲	鏡、不死薬(帝)
『本朝神社考』	神社集	記載なし
『国名風土記』	風土記	記載なし
★『和漢朗詠集和談抄』	歌注釈	其の面影の真澄鏡(帝)
『富士山の本地』	御伽草子	記載なし

図 1 (★印は形見の品の記載があるもの)

2-1. 形見の品

形見の品は、一般に i 「故人または遠く別れた人を思うよすが」、ii 「本人の代わりとして機能する形代」、iii 「過ぎ去った季節やことを思い出すきっかけ」の三つの機能に大別される。『万葉集』及び八代集に絞って調査した結果、i 「故人または遠く別れた人を思うよすが」としての機能が多くのことが明らかとなった。また、贈られる品としては衣や文や鏡が多く、『万葉集』の時点で既に鏡が贈られていることが注目される。

2-2. 竹取説話の鏡

古今集注釈書の竹取説話では、鏡は次のように記述される。

- a: 『古今和歌集序聞書 三流抄』
「胸ニコガル、思ヒ火ト成テ鏡ニ付テ」
- b: 『頓阿序注』
「此鏡をむねの上におきて嘆き悲しみ給ひしに、なげきの火、鏡にもえつきて」
- c: 『毘沙門堂本古今集注』
「帝、コノ鏡ヲ胸ニヲキテネ給ケレバ、思、火ト成テ鏡ニツキテヤケケリ」
- d: 『古今為家抄』
「帝、御鏡をむねにあてて嘆き給ひければ思ひ火と成りて鏡につきて燃えけり」
- e: 『了譽序注』
「泣々国ニ下リ、思ヒアマリニ禅定ニノボリ、八葉ヲメグリ、名香ヲタキ、コエヲアゲテ呼ビ奉リツ、南無婦人カグヤ仙娼」ト唱へケレバ、内院

ヨリ一道ノ香雲立ノボル」

a, b, c, d では胸の思いが火となって鏡に自然に付いた描写がされていることが確認できる。e は他の古今集注とは性質が違う内容と成っているが、何れにしても煙が関係することが確認できる。

一方、『竹取物語』の形見の品の一つ、不死の薬は帝によって燃やすように命じられ、富士の噴煙の由来として語られる。従来、この点に関しては荷前の使の宣命(益田勝実「光源氏の退場—「幻」前後—」(『文学』50-11, 1982. 11))や韓国の焼紙との共通点(小嶋菜温子「山陵使・伊勢使と焼紙(ソジ)—(煙)のシャーマニズム」(小嶋菜温子『かぐや姫幻想—皇権と禁忌』森話社, 1995 所収))により、国家祭祀の性質が見出されてきた。しかし、竹取説話における鏡から立ち昇る煙に関する論考は少なく、『竹取物語』の煙と混同して理解されることも少なくない。不死の薬と鏡では品物が違う上に、『竹取物語』では燃やされていたことに対し、竹取説話では自然に思いの火が燃え移る描写がされているという問題がある。

2-3. 富士の煙と恋

鏡から立ち昇った煙が富士の煙として語られた点に着目し、さらに調査を進めたところ、古今集注における竹取説話は、仮名序「富士の煙に人を恋ひ」または「今は富士の山も煙たたずなり」の注として語られていることが明らかとなった。

「思い(思ひ)」と「火」を関連させる発想は古く、「燃ゆる思ひ」などとして和歌世界に定着していたものである。また、仮名序「富士の煙に人を恋ひ」とあるように、富士の煙と関連させて詠む歌も多いことを確認した。

3. まとめと今後の課題

富士の煙に恋を詠む話として、人口に膾炙されていたのが『竹取物語』であったことは疑いようがない。しかし、煙と恋を関連させるとき、不死の薬を焼却する展開では少しわかりにくいものがあつたのだろう。そうした時、古くから歌の世界で詠まれてきた、富士の煙と「胸の思い」の組み合わせから、胸の思いの火の煙が富士の煙として可視化されるという発想に至ったと考える。そこで形見の品としては一般的であった鏡が発想されたことが想定される。今後は、引き続き鏡から立ち昇る煙について調査を進め、竹取説話における形見の鏡の意味合いを明らかにしていく。

4. この助成による発表論文等

なし